



マサバ（対馬暖流系群）①

資料 2 - 3

マサバは日本周辺に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

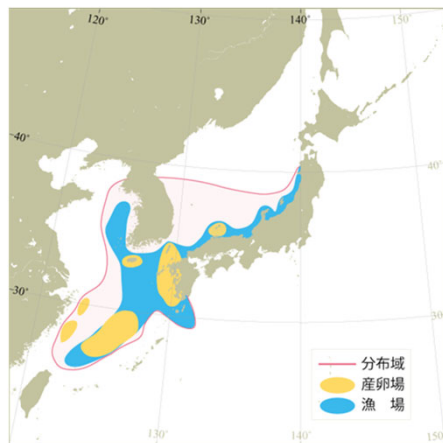


図1 分布域

東シナ海南部から日本海北部沿岸域、さらに黄海まで広く分布する。

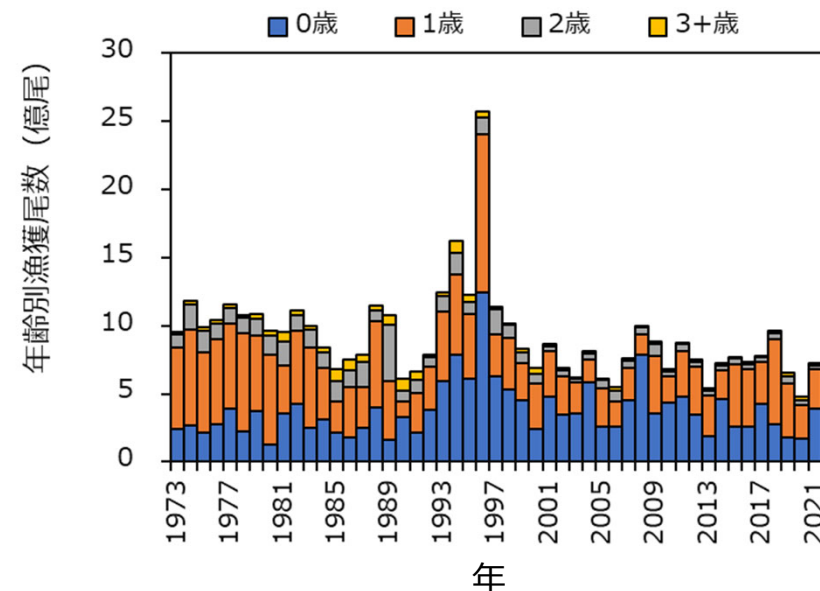


図2 漁獲量の推移

日本と韓国を合わせた漁獲量は、1970～1980年代は安定していたが、その後減少し、1996年に急増したあと、再び減少した。2000年代以降はほぼ横ばいであり、2022年は21.2万トンであった。そのうち日本は10.1万トン、韓国は11.1万トンであった。

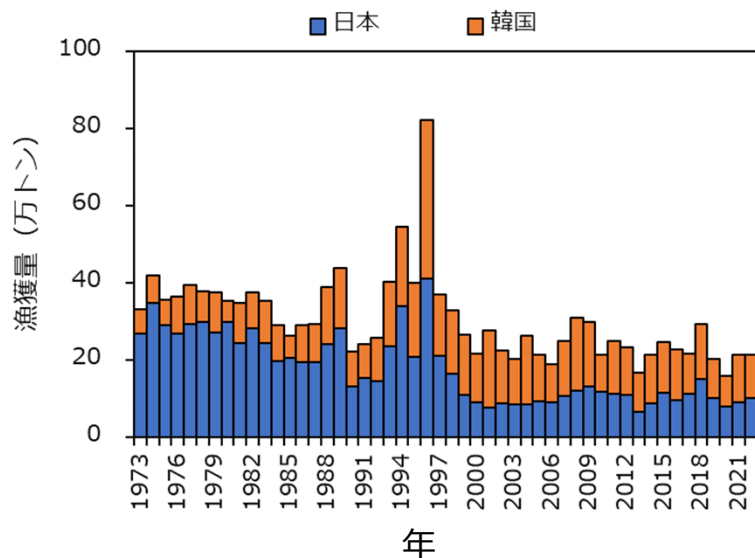


図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢組成を尾数でみると、0歳（青）、1歳（オレンジ）を中心に構成されており、2歳以上が占める割合は少ない。

マサバ（対馬暖流系群）②

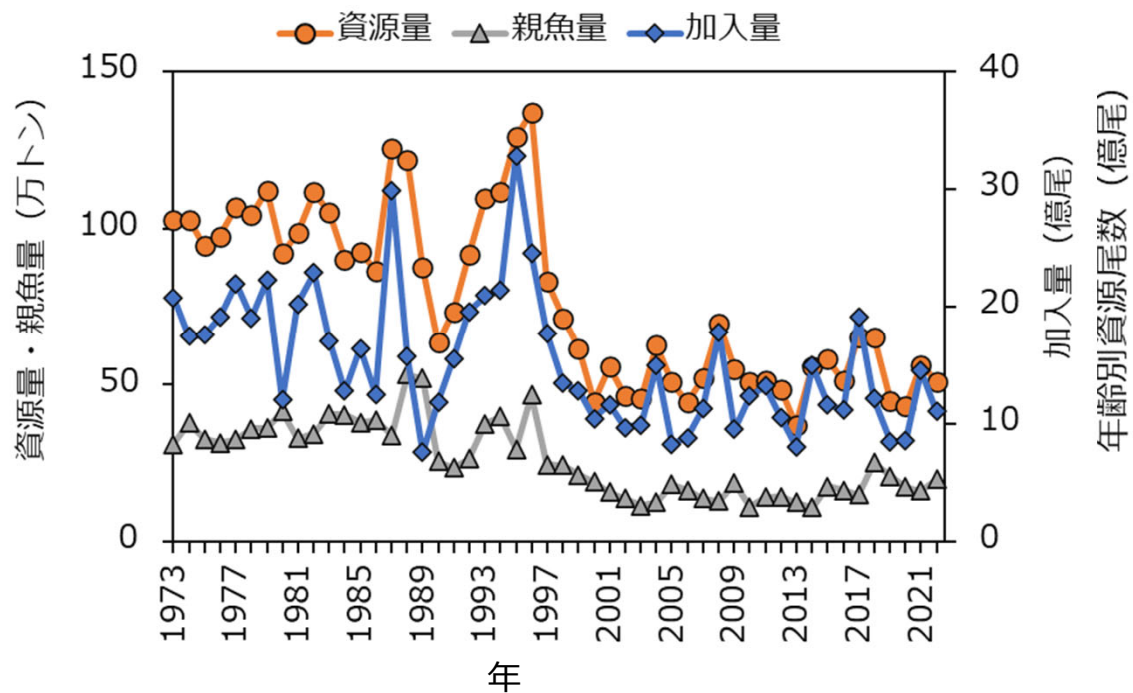


図4 資源量・親魚量・加入量

資源量は2019～2020年の低加入などの影響で減少し、2020年に43万トンとなったが、2021年以降やや回復し、2022年は51万トンであった。加入量（0歳の資源尾数）は2019～2020年は低かったが、2022年は11億尾と推定された。親魚量は直近5年間（2018～2022年）でみると横ばい傾向で、2022年には20万トンであった。

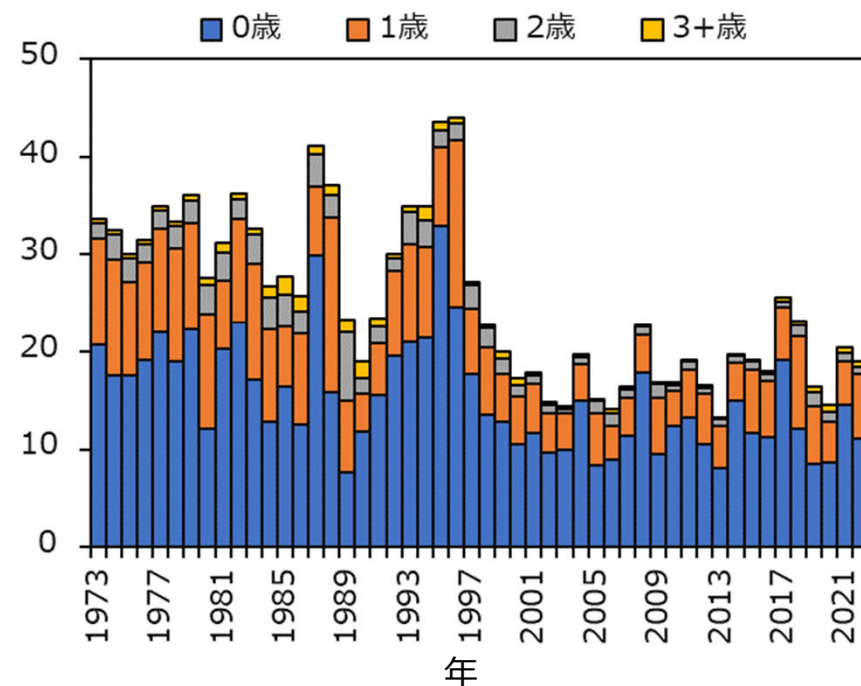


図5 年齢別資源尾数

0歳魚と1歳魚の占める割合が高い。近年では、0歳魚尾数は2017年は19億尾と多かったが、2019年と2020年は8.5億尾と8.6億尾と少なかった。2021年は15億尾、2022年は11億尾と推定された。

マサバ（対馬暖流系群）③

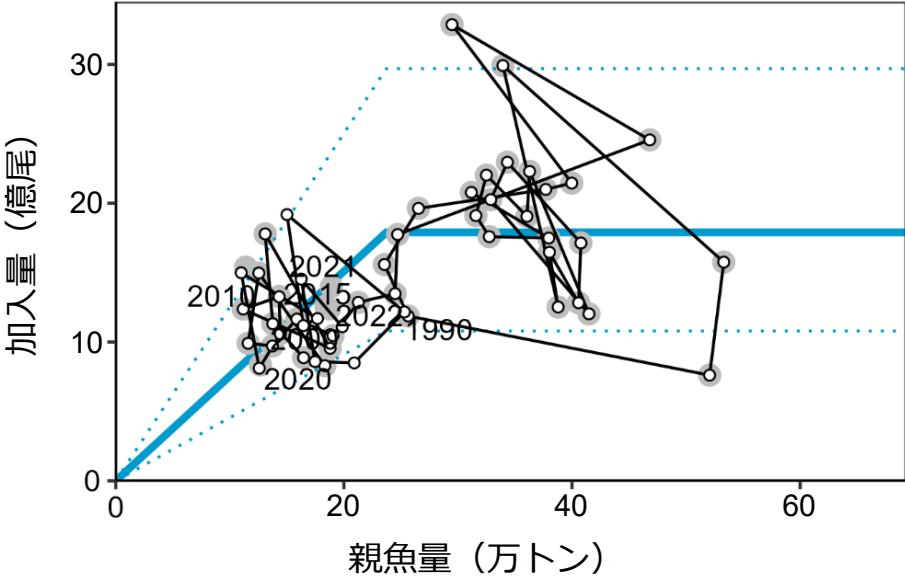


図6 再生産関係

1973～2017年の親魚量と加入量に対し、ホッケ－・スティック型の再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で実際の親魚量と加入量の90%が含まれると推定される範囲である。

灰丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2023年度資源評価で更新された観測値である。

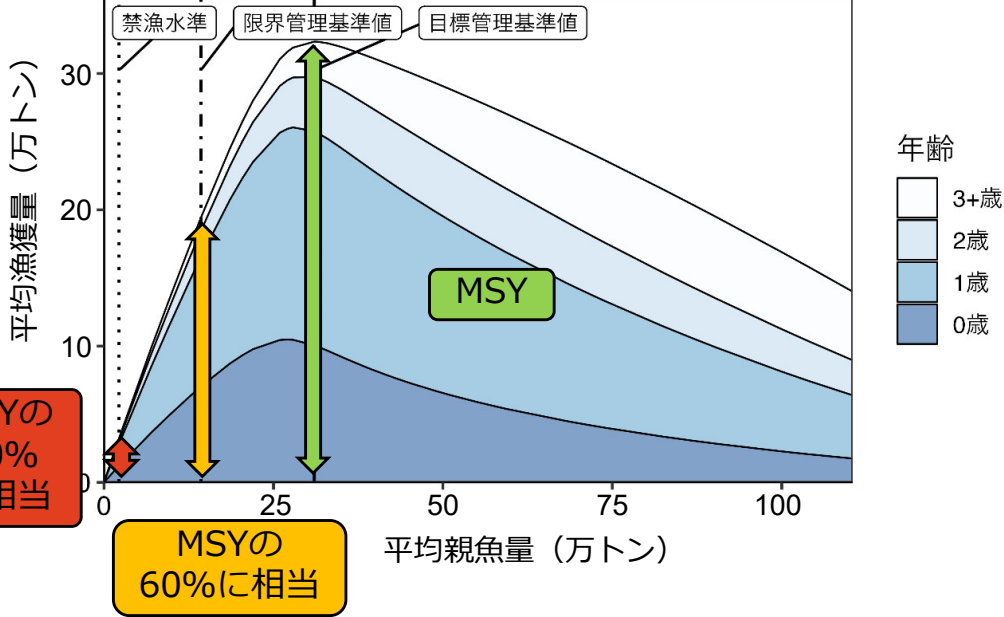


図7 管理基準値と禁漁水準

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は31.0万トンと算定される。目標管理基準値はSBmsy、限界管理基準値はMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準はMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量である。

目標管理基準値	限界管理基準値	禁漁水準	2022年の親魚量	MSY	2022年の漁獲量
31.0万トン	14.3万トン	2.2万トン	19.9万トン	32.3万トン	21.2万トン

マサバ (対馬暖流系群) ④

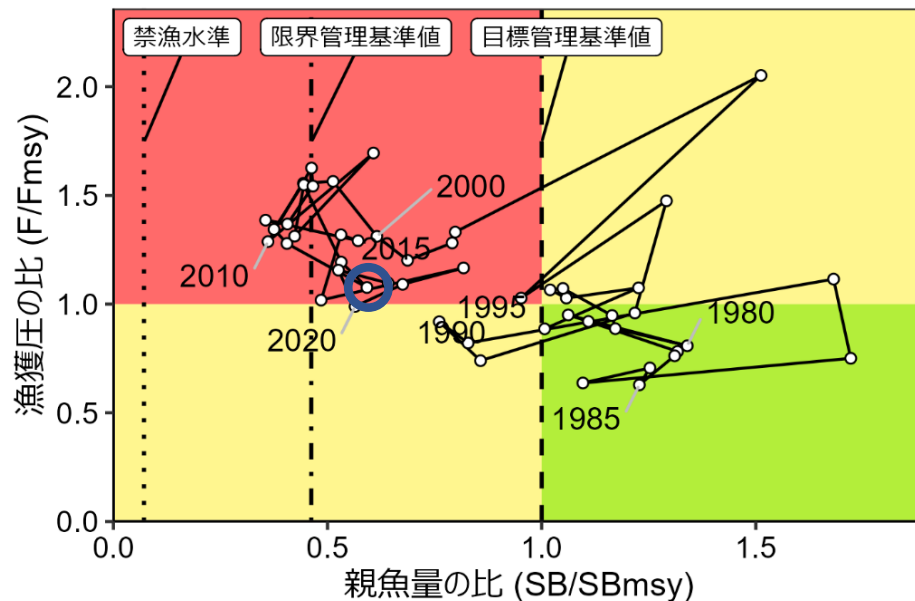


図8 神戸プロット (神戸チャート)

漁獲圧 (F) は、1980年代は概ね最大持続生産量 (MSY) を実現する漁獲圧 (Fmsy) を下回っていたが、1994年以降は2020年を除いてFmsyを上回っている。親魚量 (SB) は、1980年代は最大持続生産量を実現する親魚量 (SBmsy) を上回っていたが、1997年以降はSBmsyを下回っている。

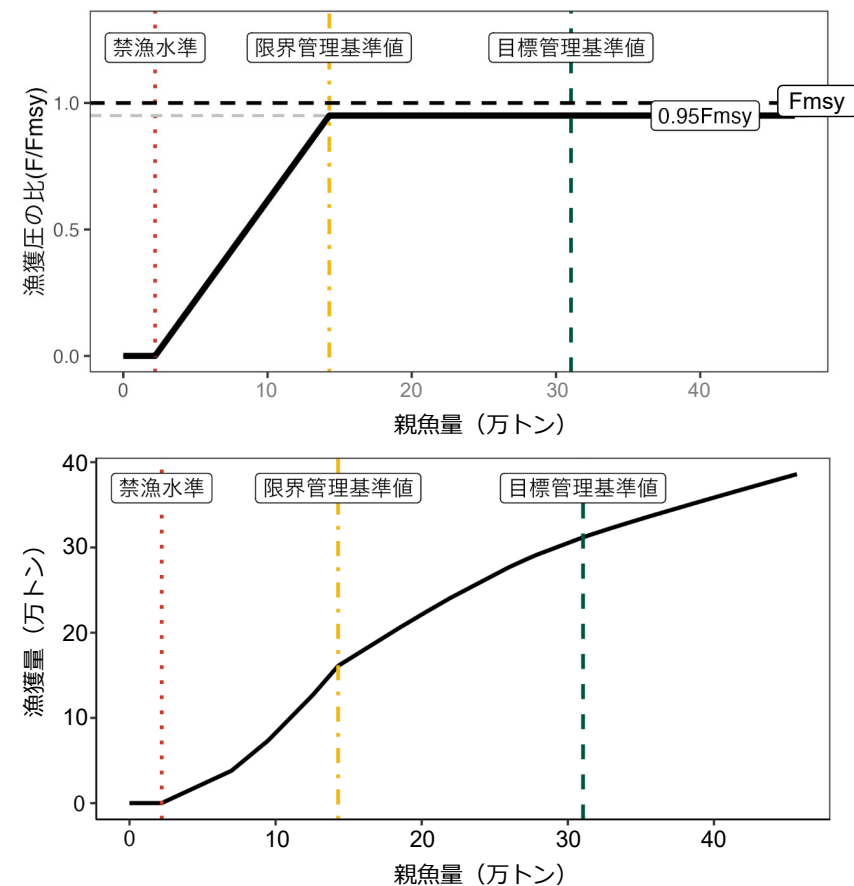
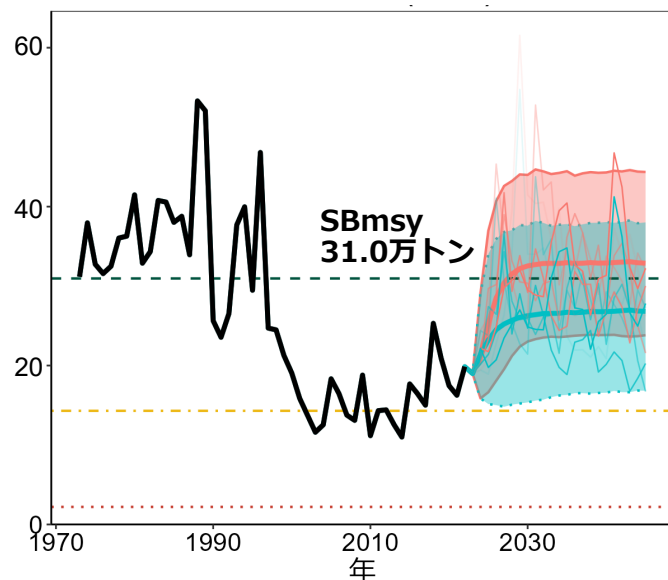


図9 漁獲管理規則 (上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量)

Fmsyに乘じる調整係数である β を0.95とした場合の漁獲管理規則を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

マサバ（対馬暖流系群）⑤

将来の親魚量（万トン）



将来の漁獲量（万トン）

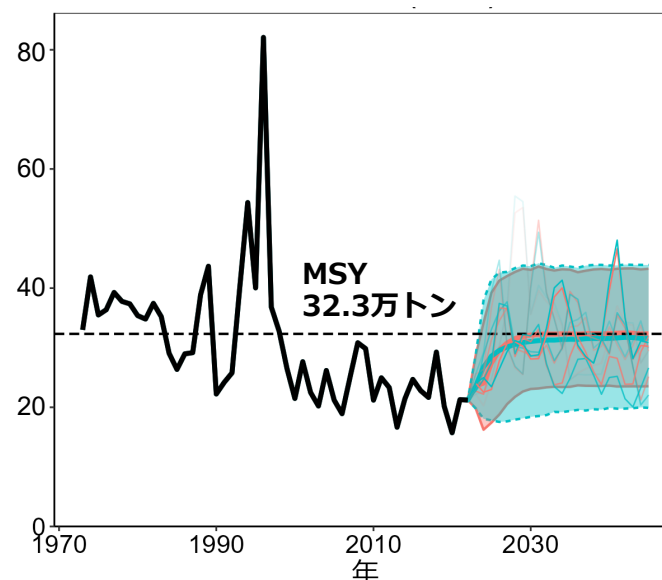


図10 漁獲管理規則の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

β を0.95とした場合の漁獲管理規則に基づく漁獲を継続した場合の将来予測結果を示す。親魚量の平均値は目標管理基準値以上、漁獲量の平均値はMSY水準でそれぞれ推移する。

- 漁獲管理規則に基づく将来予測 ($\beta=0.95$ の場合)
- 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1万回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

- MSY
- 目標管理基準値
- 限界管理基準値
- 禁漁水準

マサバ（対馬暖流系群）⑥

表1. 将来の平均親魚量（万トン）

表1. 将来の平均親魚量（万トン）				2030年に親魚量が目標管理基準値（31.0万トン）を上回る確率						
β	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	
1.0	19.9	19.0	21.4	24.6	27.2	28.7	29.6	30.2	30.6	44%
0.95	19.9	19.0	21.4	25.3	28.5	30.4	31.5	32.2	32.5	57%
0.9	19.9	19.0	21.4	26.1	29.9	32.2	33.5	34.2	34.5	69%
0.8	19.9	19.0	21.4	27.6	33.0	36.1	37.7	38.6	38.9	89%
現状の漁獲圧	19.9	19.0	21.4	23.2	24.5	25.2	25.7	26.1	26.3	23%

表2. 将来の平均漁獲量（万トン）

β	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
1.0	21.2	23.6	25.0	27.9	29.7	30.7	31.5	31.9	32.1
0.95	21.2	23.6	24.1	27.4	29.6	30.8	31.5	31.9	32.1
0.9	21.2	23.6	23.2	26.9	29.4	30.7	31.4	31.8	32.0
0.8	21.2	23.6	21.2	25.7	28.7	30.1	30.8	31.2	31.3
現状の漁獲圧	21.2	23.6	26.8	28.6	29.6	30.1	30.6	30.9	31.1

漁獲シナリオに基づき漁獲した場合の平均親魚量と平均漁獲量の将来予測を示す。漁獲シナリオでは、 β に0.95を用いた漁獲管理規則で漁獲を行う（赤枠）。2023年の漁獲量は、予測される資源量と現状の漁獲圧（2020～2022年の平均： $\beta=1.1$ 相当）により仮定した。

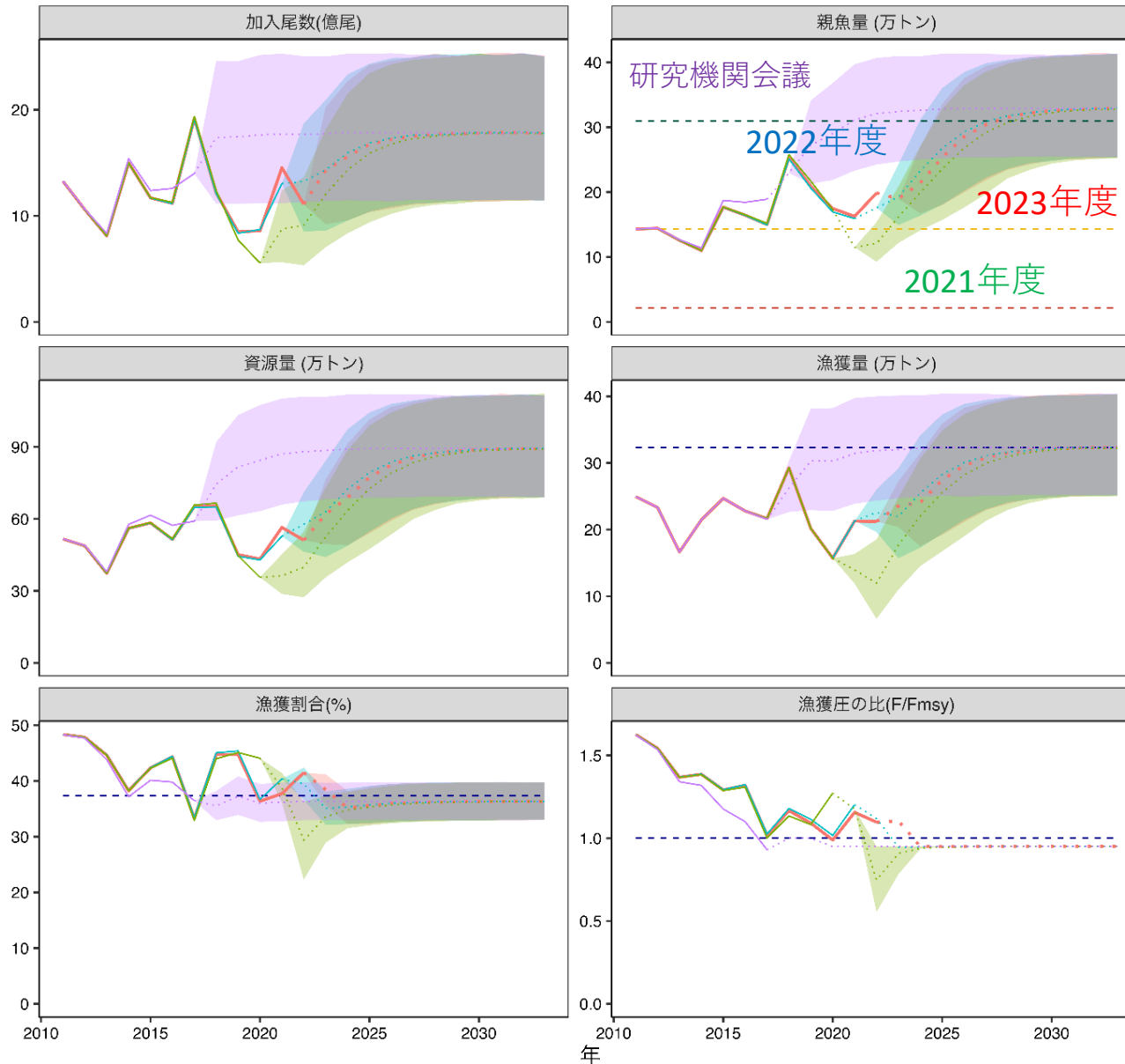
この漁獲シナリオに従うと、2024年の平均漁獲量は24.1万トン、2030年に親魚量が目標管理基準値を上回る確率は57%と予測される。併せて、 β を0.8～1.0の範囲で変更させた場合と現状の漁獲圧を続けた場合の将来予測結果も示した。

表3. ABC要約表

2024年のABC （万トン）	2024年の親魚量予測平均値 （万トン）	現状の漁獲圧に対する比 （F/F2020-2022）	2024年の漁獲割合 （%）
24.1	21.4	0.86	35

※上記の表は暦年（1～12月）の値であり、2024年漁期（7月～翌年6月）のABCは26.8万トンである。
表の値は今後も資源評価により更新される。

2022年度評価との比較



- 2022年度と2023年度の評価結果に大きな違いはない